
新世紀 仮面ライダーオーズ ~果て無き欲望~

SS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新世紀 仮面ライダーオーズ ～果て無き欲望～

【Nコード】

N6934V

【作者名】

SS

【あらすじ】

未曾有の災害「セカンドインパクト」から20年余り・・・日本の新たな首都第3新東京市は「ヤミー」と呼ばれる怪物とグリーンと呼ばれる怪物の脅威にさらされていた。そして、それらに対抗する組織「NERV」・・・

この都市にNERV司令官の息子である無欲な少年が現れたとき果てしなき欲望の物語が始まる・・・

はじめに(前書き)

さあ、新連載！ 不安だけどGO！

はじめに

こんにちは。SSです。

この小説は新世紀エヴァンゲリオンに仮面ライダー000をぶち込んだ作品です。ストーリーは旧作ですので、マリは登場しないと思います。

できるだけストーリーに沿いたいたのですが、限界があるかもです。

この作品は二次小説としては処女作なのでこじつけ・無理やり・超展開・意味不明などがタップリです。それらがOKな方はどうぞつたない駄文ですが楽しんで言ってください。

では、次の人物紹介でお会いしましょう。

はじめに（後書き）

というわけで始めました。新作です。

私は別の小説も書いているので宜しければそちらも読んでみてください。

人物紹介（前書き）

まだ本編に入っていないのに人物紹介（笑）

人物紹介

碓工イジ 年齢 17歳

NERV司令官碓ゲンドウの一人息子。

幼少時に母のユイを亡くし、親戚夫婦に預けられる。母を失ったことと父が自分を育てるのを放棄したことなどから内気な子供だったが預け先の家主一（じいちゃんと呼び今でも尊敬。故人）

が旅好きでよく色々なところに連れて行ってもらい心身ともに逞しく成長。ゲンドウの仕事について人類を守る仕事と聞かされ、自分も人々を守りたいと思いいじちゃん病で死去した後内戦地域などでボランティアなどをするようになる。しかし、本編開始の少し前に突然帰国し、第三新東京市に向かう。帰国して以来欲望が無いかのようになっている。人の命を救うためなら自分が危険に陥いる事も構わない。

仮面ライダーオースに変身する。

〇〇〇主人公の火野映司そのもの。シンジは忘れて（笑）

綾波レイ 年齢 不詳（第壹高等学校2年生なので17歳前後
と思われる）

NERVに所属する謎多き少女。NERVの戦闘要員ソルジャーの一人で同じソルジャーの伊達明、後藤慎太郎の両名が外国支部へ出向中の今、日本本部唯一のソルジャーである。

主にNERV製対ヤミー用生体スーツ「バース」のプロトタイプを装着し、データ収集と訓練に励んでいる。彼女もまた無欲であるが、ただ欲が無いだけで他は表情豊かな好青年のエイジと違い感情が抜け落ちてしまっているかのような性格。

仮面ライダーバース 零号機に変身する。

人物紹介（後書き）

はい。こんな感じで。本編中では解説できないであろう設定です。

本編はチヨツチまっつてね。

プロローグ（前書き）

さあて、本編だ！
世界観説明だが・・・

プロローグ

未曾有の大災害「セカンドインパクト」

南極で起こったそれは地球全体の生命体を半分に減らすという甚大な被害をもたらした。

その影響で海は赤く染まり生き物が住めなくなり、海洋生物は絶滅。日本では四季は無くなり夏のみとなった。しかし、20年余り経過した今では環境再生プロジェクトが成功。元の地球に戻りつつあった。

そして、人類をまた新たな脅威が襲う。

「グリード」と「ヤミー」である。

詳細は一切不明だが、どちらも動物に似た化け物であるという事。今のところ人の前に姿を現すのは少ないということ。現代兵器がほとんど通用しないほどの力をもっていること。セカンドインパクトが発生した直後からグリードと見られるUMAが目撃されていることからセカンドインパクトの発生と同時期に出現したと思われることが判明している。

そして・・・

〈某空港〉

「????」「うーん！久しぶりの日本だなあ！ばあちゃん元気かなあ。」

一人の少年が出てくる。高校生ぐらいだろうか。それにしても大人びている感じがするが。

この少年が日本に降り立ったとき、物語は始まった・・・

プロローグ（後書き）

次回予告・・・

「ただいま。ばあちゃん！」

「お父さんから手紙が来てるわよ」

「第3新東京市か・・・生まれ故郷って奴かな。」

「大丈夫だって！ちよつとのお金と明日のパンツがあれば。」

第巻話 「帰国と手紙と第3新東京市」

お楽しみに！

感想待つてマース！

「ねえねえ。俺の出番あれだけ？ セリフ1言？」

人物紹介でもうバレットから良いでしょ！

第巻話 「帰国と手紙と第3新東京市」(前書き)

新世紀 仮面ライダーオーズ ㄱ果て無き欲望ㄱ

遂に本編スタート!

ジャンクションっぽく。映像はエイジの後ろ姿をイメージしていた
だけば。

第巻話 「帰国と手紙と第3新東京市」

↳第3新東京市からそこそこ離れた地域↳

????視点

????「うーん！懐かしき我が家！」

俺は2年ぶりくらいの我が家の玄関を開け、中に声をかける。

????「ただいま！ばあちゃん。」

奥から40代後半くらいの女性が出てくる

ばあちゃん「エイちゃん？ほんとにエイちゃんなの？」

????「うん！真正銘。本物の碇エイジだよ！」

ばあちゃんは涙を流して俺に抱きついてくる。

ばあちゃん「エイちゃん……。心配したんだよ……。エイちゃんが行った国で内戦が起こったって聞いて、連絡取るつにも通じないし……。怪我とかは無いの？」

俺は大丈夫、と言って両手を広げくると回り元気なのをアピールした。それを見たばあちゃんは安心したようで涙を拭いキッチンへ向かった。ご馳走を用意してくれていたらしい。

俺の大好物ばかりの食事を終え、俺はばあちゃんに話しかけられた。

ばあちゃん「そういえば。お父さんから手紙が来てるわよ。」

エイジ「へ？ばあちゃんにも？」

実は俺も父さんから手紙をもらっていた。内容は・・・「来い。ゲンドウ」まるで電報だ。父さんは今第3新東京市にいる。つまり第3新東京市まで来いということ。

ばあちゃん「うん。私宛てのと、エイちゃん宛ての。」

エイジ「なんて？」

ばあちゃん「私には、これ。エイちゃんにはこの2通。」

内容はばあちゃんあてには・・・「いままでエイジの面倒をみてもらい感謝する。じきにエイジが帰ってくるだろうからそのときには同封した手紙を見せてくれ。」と言うもの。

俺には先ほどの電報みたいなのと、箱根駅で待っていれば迎えに行く。という旨の文章に水着姿の女性が所謂「だっちゅーの」のようなポーズでピースサインをしている写真が同封されたものだった。

あの父さんが今更一緒に暮らそうなんていうわけ無いからたぶん仕事関係の話だろう。だとすると

この女性は父さんの部下の人かな。変わった人だなあ。

(第3新東京市か・・・。生まれ故郷って奴かな。)

ばあちゃん「お父さん、何だった？」

エイジ「第3新東京市に來いって。たぶん仕事でも手伝わせる気じゃないかな。」

ばあちゃん「へえ……。いつ出発するの」

エイジ「2日後に來いって話だから……。うん、今から！」

ばあちゃん「ええ！ここから第3新東京市までは新幹線で2時間くらいだよ？」

エイジ「久々の日本だし、自分の足でいってみたいんだ。」

ばあちゃん「そ、そう。じゃ、荷物の用意……。」「いらぬいよ。」「え？」

エイジ「荷物なんて、これで十分！」

そういって俺はポケットの中の物を見せた。数百円くらいの硬貨と俺の「明日」だ。

ばあちゃん「こ、これ。パンツ？じいちゃんみたい……。それに
お金もこれだけ……。」「

そういって俺は早速立ち上がり玄関で靴を履き始めた。

エイジ「じゃ、そろそろ行くよ。」「飯おいしかったよ。次はいつ帰ってこれるか分かんないけど。」「

ばあちゃん「エイちゃん。本当に大丈夫？」

エイジ「大丈夫だって！ちよつとのお金と明日のパンツがあれば。」

そついつて俺は家を出た。日本を旅するのは久々だとか、父さんの顔もつ忘れちゃってるな、とか色々なことを考えながら・・・

第巻話 「帰国と手紙と第3新東京市」（後書き）

次回予告・・・

「電話もつながらないし第一級厳戒態勢なんてどうなってるんだろ
う?。」

「なんだ?この赤いメダル?タカかな・・・。」

「なんだ!?カマキリみたいな怪物と・・・銀と緑の・・・ロボッ
ト?。」

「あなたが碇エイジくん!?ゴメン遅くなった!」

第巻話 「迎えと怪物と赤いメダル」

感想マツテマース!

誤字脱字等の指摘もできたらお願いします。

サブタイの意味 帰国 エイジが日本に帰ってきたこと

手紙 エイジに送られてきた手紙のこと

第3新東京市 手紙の内容とエイジの行き先

タイトル訂正 第3東京市 第3新東京市

第貳話 「迎えと怪物と赤いメダル」(前書き)

新世紀 仮面ライダーオーズ ㄥ果て無き欲望ㄥ

この後すぐ！

ジャンクション。今回はタカ・コアを握り締めるエイジをイメージしてください。

第弐話 「迎えと怪物と赤いメダル」

新世紀 仮面ライダーオーズ 前回の三つの出来事！

1つ！ 無欲な少年、碓エイジが日本に帰国する！

2つ！ エイジの父、碓ゲンドウが手紙でエイジを第3新東京市に呼びつける！

3つ！ その呼びかけに応じ、エイジは徒歩で第3新東京市へ向かった！

～第3新東京市～ 箱根駅前

エイジ視点

俺は箱根駅に居た。待ち合わせの時間を少しだけオーバーしてしまつたが誰も居ない。写真の女性も居ないが・・・この町に来たときから「人っ子一人」居ない。まるでゴーストタウンだな、と思いつながら公衆電話で電話をかける。女性の電話番号もあの手紙に同封されていた。

〜数分後〜

なんどかけても返ってくるのは「第一級厳戒態勢が発令されました。最寄の避難所かシェルターに避難してください」というアナウンスだ。

エイジ「電話もつながらないし第一級厳戒態勢なんてどうなってるんだろう?」

ここは日本だ。そんな厳戒態勢なんてよっぽどのがあったのかな?

エイジ「うーん。ま、考えても仕方ないし避難所って所行けばどうにかなるでしょ!そんな事よりのど渴いたな。自販機無いかなあ?」

さつすが駅!探さなくてもすぐそばにあった。なんか見たこと無い自販機だ。白、黒、金色とやけにカラフルで横に車輪みたいなのが付いてるし見たこと無いカンが入っている。ご当地限定って奴かな?と思い近づいてみると・・・

(ん?何か落ちてる。)

拾い上げてみる。鳥の彫刻が入った大きめの赤いメダルだった。

エイジ「なんだ?この赤いメダル?タカかな・・・。」

誰かの落とし物かな?だとしたら放っては置けない。でもこの状況で交番なんて開いてないだろうし・・・。

その時、ドカーンという爆音が聞こえた。

エイジ「!? なんだ!？」

気づいたとき俺は走り出していた……。

↳ 駅から少し離れた所↳

そこには信じられない光景が広がっていた。

カマキリに似た明らかに人間ではないが、人間の形をした化け物とそいつに銃らしきものを撃っている銀色と緑のボディに蒼のラインが走っているロボットのような戦士だった。

エイジ「なんだ!？カマキリみたいな怪物と……銀と緑の……ロボット?」

戦士は怪物に対して相変わらず発砲を続けている。しかし怪物は気にも留めず凄まじいスピードで戦士に接近し手に持っているカマで切りつける。

戦士は銃を取り落とし吹っ飛ばされてしまう。

(!?)

まずい。動き方でわかった。戦士は怪我をしている。しかもほぼ全身を。

(こんなになくても戦うなんて……。)

そして俺は走り出し、戦士が取り落とした銃を取り戦士をかばうように力の前に立ちふさがった。

カマキリヤミー「ふん。人間か。そいつから離れて金目の物を置いていけ。そうすれば命は助ける。」

エイジ「やだね。金なら渡すけど、この人は渡さない！」

そういつて銃を発砲する。普通の拳銃より大きい。反動は拳銃より少し上くらい。撃てる！

でも怪物は気にも留めずこっちにじわじわとゆっくり近づいてくる。

(だめかも・・・)

そう思ったときスポーツカーが一台突っ込んできた。運転席の窓からボールが投げられる。

????「離れてっ！」

ボールが怪物に命中した瞬間ものすごい火炎がボールから飛び出た。怪物の周りのものがすべて黒こげになる。怪物は糸が切れたように動かなくなった。

????「レイ！3番エレベータから本部に帰還して手当てを受けてっ！」

車に乗った女性から指示を受けた戦士はコクリとうなずき近くの街灯の近くに行く。するとその地面がエレベーターのように沈み、

開いた穴にはシャッターのようなものでふさがれた。

「????」あなたが碇エイジ君!? ゴメン遅くなった!」

エイジ「あ、あなたが葛城ミサトさん?」

ミサト「そう、早く乗って!」

俺はミサトさんが運転するスポーツカーに乗り込んだ。

スポーツカー独特の豪快なエンジン音とともに車は走り出した・・・。

第貳話 「迎えと怪物と赤いメダル」(後書き)

次回予告

「遅れて本当にゴメン！」

「あの怪物はなんなんですか？」

「お父さんの事、キライ？」

「もしかして迷ってませんか？」

第参話 「地下と迷子と自己紹介」

感想マツテマース！

誤字脱字などの指摘もお願いします。

サブタイの意味 迎え ミサトの迎えのこと

怪物 カマキリヤミーのこと

赤いメダル エイジが自販機のしたで拾った物の

こと

変身はもうチョッチ待っててね

第参話 「地下と迷子と自己紹介」(前書き)

新世紀 仮面ライダーオーズ 〽果て無き欲望〽

この後すぐ！

ジャンクション。今回はラインが蒼になったプロトバースの立ち姿。

第参話 「地下と迷子と自己紹介」

新世紀 仮面ライダーオーズ 前回の三つの出来事！

1つ！ 碓エイジが第3新東京市に到着し、緊急事態に陥っている事を知る！

2つ！ エイジは自販機の下に落ちていた謎の赤いメダルを拾う！

そして3つ！ 謎の銀と緑の戦士と異形の怪物の戦闘に巻き込まれたエイジだったが写真の女性、葛城ミサトに助けられた！

第三者視点

エイジはミサトの運転するスポーツカーの中でミサトと会話してい

た。

エイジ「俺は、碇エイジです。ってまあ、しってますよね。」

ミサト「私は葛城ミサト。NERVで作戦責任者を任されているわ。階級は一尉。」

エイジ「やっぱり！父さんの部下の人でしたか。」

エイジは既にNERVについて知っていた第3新東京市までの道中で聞いていたのだ。といっても、司令官が自分の父親という事くらいだが。

ミサト「遅れて本当にゴメン！あの怪物が突然現れたから、迎えに行けなかったの。」

エイジ「いえ、良いんですよ。あの状況じゃ仕方ないです。そんな事より、あの怪物はなんなんですか？」

ミサトは考え込むような動作を取りつつ言った。

ミサト「あれは「ヤミー」詳しいことは後で話すけど人類の敵ってところ。」

エイジ「もしかして、あいつらを倒すのが父さんの……。」

ミサト「そうよ。」

それからしばらくして車は地下に入った。地下には凄まじく広い土地がひろがっていた。

エイジ「わあ！すごい！何ですか？コレ！」

ミサト「ジオフロントよ。海外暮らしが長いんだっけ？日本ではちょっとした話題になってるの。」

それからしばらくして・・・
もうジオフロントに入ってから10分はたっただろうか。

エイジ「ミサトさん。まだですか？」

ミサト「もう少し。ここってやったら広いからめんどくさいのよねえ〜。」

〜2分後くらい〜

ミサト「ねえ、気を悪くしないでほしいんだけど・・・。」

エイジ「？」

ミサト「お父さんの事、キライ？」

エイジ「そうですねえ。大好きってワケではないですね。」

ミサト「やっぱり・・・自分と一緒に居なかつたから？」

エイジ「いえ。あんな怪物相手に仕事してるんです。子供の俺なんか居たら足手まといです。」

そんなことより・・・もっと母の死を大事にしてほしかった。って言い方おかしいですね。

確かに当時俺はまだ小さくて死つていう事がよくわかってなかった。でもせめて、あの人の口から母さんにはもう合えないって言ってほしかった。それに葬式も挙げずに、即俺を預けて消えちゃいましたから……。」

エイジはそれにとつぶやき直後に「いえ、なんでもないです」と笑顔でミサトに言った。ミサトもこれ以上深くは聞かなかった……。

くさらに数分……く

エイジ「もしかして迷ってませんか？」

エイジはたまらず聞いた。なぜかというと明らかに同じところをさつきから行ったりきたりしており、ミサトはさつきから地図を食い入るようにつめて冷や汗が目立つようになっていた。

ミサト「ここをこう行って……こうちをこう曲がって……あつ！あつた！出口よエイジ君！」

エイジ「いや、入り口ですよ。出口だったらまたリスタートじゃないですか。」

そうこう言っている間に車から降り、施設の中に入る二人。

????「遅いわよ！葛城一尉！大遅刻じゃない！」

その前に白衣を着た金髪の女性が立ちふさがった……

第参話 「地下と迷子と自己紹介」(後書き)

次回予告

「あつ！それ俺のコア！」

「あれはヤミー。俺たち「グリード」が人間の欲望から生み出す存在だ。」

「コレを使って戦え。嫌ならば帰れ。」

「へえ。15年ぶりに呼び出しておいて、戦えなんて随分勝手だね・
。。。」

「変身・・・！」

<タカ・トラ・バッタ！>

第四話 「再開と右腕と変身」

ついに次回、アイス好きの鳥君と変な歌が登場します！

サブタイの意味 地下 ジオフロントのこと

迷子 エイジたちのこと

自己紹介 エイジとミサトの冒頭での自己紹介のこと

第四話 「再開と右腕と変身」(前書き)

新世紀 仮面ライダーオーズ 〽果て無き欲望〽

この後すぐ！

ジャンクシヨン。今回は変身ポーズをとるエイジ。

第四話 「再開と右腕と変身」

新世紀 仮面ライダーオーズ 前回の3つの出来事！

1つ！ エイジは父の部下だという女性、葛城ミサトと出会う！

2つ！ エイジはミサトに父への想いを告げる！

そして3つ！ ミサトがNERV本部への道中で道に迷ってしまった！

エイジ視点

「????」あなたが碇エイジ君？私は赤木リツコ。 N E R V 技術開発部技術局第一課に勤めているわ。」

エイジ「はじめまして。」

さっきまでミサトさんを怒っていた金髪の白衣を着た女性が自己紹

介してくれた。ミサトさんはよほど怖かったのか涙目になってるけど……。

それからしばらくして通路を歩いていると前から金髪の男性が歩いてきた。俺より2〜3歳上って所かな？

???「オイ！二人とも遅せえぞ！もうすぐアイツが動き出す。」

ミサト「うーん……。もうチョツチ食い止められると思ったんだけど……。エイジ君！走るわよ！」

エイジ「はい！あ、っと。」

走り出した拍子にさっき拾った赤いメダルを落としてしまった。するとそれをみた男性が目の色を変えた。

???「あつ！それ俺のコア！」

リツコ「え？何でエイジ君が？」

エイジ「駅前の自販機で拾ったんですけど……。」

ミサト「アंक！あんたコア落としたの？」

ミサトさんがそう言うとアंकと呼ばれた男性は「フンッ」とぶて腐れたように鼻を鳴らしながら先へ行ってしまった。

また少し進むと広いところに出た。中央にはガラスのポッドがありその中には石版のようなものが入っていた。そしてアंकの方を向いた。が、その光景に俺は息を呑んだ。右腕が赤い異形に変わっていた。

エイジ「！ お前！ さっきの怪物と同じ！」

アंक「フンツ！ ヤミーなんかと同じにするな。俺は「グリード」。
アंकだ！」

ミサト「エイジ君。落ち着いて。これから説明するわ。」

アंकが大きなモニターに映っている怪物を指差し言った。

アंक「あれはヤミー。俺たちグリードが人間の欲望から生み出す存在だ。」

その言葉から始まった話はとても信じられないような話だった。

800年前……。ヨーロッパのとある錬金術師たちは不死の最強の生物を作り出そうとした。

その結果生まれたのは動物と欲望のパワーを内包した「オーメダル」だった。

そして、オーメダルの中でも大きな力を持つ「コアメダル」とコアに比べれば力は弱いが人間の欲望によって限りなく増え続ける「セルメダル」の2種類があり、10枚一揃いだったコアを9枚にして「足りない」・「欲しい」・「満たしたい」という欲望の意思がコアに宿り生命体になったのがグリード。そしてグリードたちがセルを集めるのに使う怪物がヤミー。

エイジ「……………」

アंक「分かってねえのか！」

エイジ「うん。メダルは分かったけどグリードとヤミーの違いがさっぱり。」

アंक「チツ！アイスキャンディーを思い浮かべる！棒がコア。アイスがセル。グリードが棒のあるアイス。ヤミーは棒の無い不安定なアイス。だがグリードも完全じゃない。アイスはいつか必ず溶ける。そんな不完全なメダルの集合体でなくもつと完全な肉体を手に入れる事。それが俺たちの欲望だ！」

エイジ「分かったけど……。なんでアイス？ しかも聞いてないことまで……………」

「説明は終わったか？」

突然中年の男性が部屋に入ってきた。傍らには全身に包帯を巻いた蒼髪の少女が台に横たわっている。

エイジ「父さん？」

おぼろげながら見覚えがある。たぶんあの人は俺の父さんだ。

ゲンドウ「エイジ。コレを使って戦え。アंक説明してやれ。」

アंक「俺に命令すんな！」

父さんの手元のリモコンが操作されるとガラスポッドが開いて中の石版が露わになる。アंकがそれを持ちこっちに来る。

アंक「これは「^{オース}000」グリードやヤミーに対抗できる「力」だ！」

エイジ「カ……。」

ゲンドウ「それを使って戦え。嫌ならば帰れ。」

エイジ「へえ……。15年ぶりに呼びつけておいていきなり戦えなんて随分勝手だね。」

その後全員が押し黙る。

ゲンドウ「ふん。冬月、私だ。本命が使えなくなった。バースの準備だ。レイ、行けるか？」

レイ「はい。」

レイと呼ばれた少女が返事をする。さっきの戦士はこの子かもしれない。

エイジ「ちょっと待ってよ。」

ゲンドウ「なんだ。まだ居たのか。」

エイジ「誰もやらないとは言っていない。それに俺が断ったらその子、戦うんでしょ？じゃあ尚更断れない。」

ミサト・リツコ「エイジ君……。」

アंक（コイツ……馬鹿だ。だが、使える！）

エイジ「俺が戦って消えてしまう命が救えるなら……戦っ！」

父さんはやりと笑うとレイという子とともにどこかへ消えた。

アंक「よし！こいつを腰に当てる！」

俺は言われたようにした。すると、石版が割れて中から青と黒で3つの穴が開いた長方形のメカになった。そしてその端からベルトが飛び出すと俺の腰に巻きついた。右腰には金と黒の丸い装置、左腰にはなにかのケースがある。

アंक「メダルを三枚ここに嵌める。力が手に入る。」

そういつて三つの穴を指さし、赤・黄・緑のコアを俺に渡す。それをベルトに嵌める。

<ガチャ！ ガチャン！>

最初に両脇に赤と緑。その後中央に黄をセットする。そうするとベルトが斜めに傾いた。

アंक「右腰のスキャナーを使ってメダルをスキャンして、「変身しろ！」」

<キン！キン！キーン！！>

「変身・・・！」

<タカ・トラ・バッタ！>

<タ・ト・バ！タトバタ・ト・バ！>

そして俺は「カ」を手に入れた。皆を守る力を・・・。

第四話 「再開と右腕と変身」(後書き)

次回予告

「なんだあ？今の变な歌？」

「歌は気にするな！」

「セイヤアアアアアアアアッ！」

「コレがあなたの守った町よ。」

第五話 「歌と戦いと守った人々」

感想マツテマース！

例によって誤字脱字等の指摘もよろしくです。

サブタイの意味 再開 エイジとゲンドウの再開

右腕 アンクの右腕

変身 エイジの変身

ライダー紹介（前書き）

作中に登場する仮面ライダーを紹介。新しいライダーが登場するたび更新。

ライダー紹介

仮面ライダーオーズ

碓エイジが変身する仮面ライダーでオーズドライバーにメダルをセツトすることによりメダルの力を最大に解放し、そのパワーをオーズキャナーでスキャンすることにより変身する。

全身のベースは黒で胸部にプレート・オーリングサークルがあり、その図柄はスキャンしたメダルに順ずる。

謎多きライダーで誰が何のために作り出したのか等は定かではないが、碓エイジは初変身の際に、基本的な戦い方と同時に4体の怪物と自分ではないオーズが戦うビジョンを見ておりエイジより前にオーズとして戦っていた者がいると思われる。（第伍話現在）

タトバコンボ 使用メダル タカ・トラ・バツタ コンボボイス
<タ・ト・バ！ タトバ タ・ト・バ！>

オーズの基本フォームで基本コンボと呼ばれている。全体的なバランスに優れておりこのコンボから戦闘を開始し相手の能力や戦法を見極め、そこからメダルを変えていくのがオーズの基本戦術である。（第伍話現在）

原作仮面ライダー○○○では基本形態であるためメディアへの露出も高く、作品の顔とも言える存在であるが本編での扱いは酷く、グリードに対するメダルぶっこ抜きアタック以外に見せ場がほとんど

無い。それでも中盤まではまったく登場しない話は少なかったが終盤になって一気に扱いが悪化。遂には基本形態なのに変身できない状態が4〜5話続くという異例の事態となった。拳句の果てにはテレビ朝日公式HPの46話のあらすじにおいて、タトバ「フォーム」と表記され遂にコンボを解雇された。

最終回ではなぜコンボであるかが明かされ、先代オーズと同じ状態の「真のタトバコンボ」となり、最終コンボのプトティラでさえ苦戦したウヴァを圧倒し真木の介入により倒せはしなかったものの遂に「タトバキック」を決めることに成功。これが最後の登場で、ライダー史上最も不遇であった基本コンボながらも最後は華を飾った。

仮面ライダーバース

NERVが製造している対ヤミー用生体スーツ。セルメダルの力を使い、変身・戦闘を行う。コアメダルの力を持たないためグリードには効果的なダメージを与えられない。

ゼロ号機 (データ収集用)

もともと最初に製造されたバース。データ収集用の蒼いラインが体のあちこちに走っている。

初号機 (データ収集用)

本来ゼロ号機は、問題無く作動するか・人体に影響は無いかを試すために作られた物で本来はこちらがデータ収集用としてロールアウト

トされる予定だった。しかし、製作段階で問題が発生し、（人為的なミスもあるが当時のNERVはそこまで重要視される組織ではなかったため予算的な問題もある）製造は中断され、ゼロ号機が急遽データ収集に使用された。現在は製造が再開されておりバース装着者候補の訓練や新機能の実験などに使われる予定である。

式号機 （実戦用）

バースシステム初の実戦用。基本的な性能はゼロ・初号機と大差は無い。現在はNERVドイツ支部でセカンドソルジャーズの式波・アスカ・ラングレーの訓練に使用されている。（第五話現在）

参号機 （実戦用）

二号機同様の実戦用の物。現在はNERVアメリカ支部で製造中。正装着者は伊達明になる予定。（第五話現在）

バースCLAWS

バース専用の武装。詳細は不明。

Var1 ゼロ号機と同時期に日本本部で製造されたヴァージョン。後のヴァージョンに比べ性能は低め。

チェストバルカン

クレーンアーム

Var 2 ドイツ支部で二号機と同時に製造されたヴァージョン。

ドリルアーム

シヨベルアーム

キャタピラレッグ

Var 3 アメリカ支部で参号機と同時に製造中のヴァージョン。

ブレストキャノン

カッターウイング

上記の新型に加え、既存のCLAWSの性能アップと全CLAWSを合体させ、支援メカとするプログラムも製造されている。

ライダー紹介（後書き）

いろいろ更新していくのでたまにのぞいてみてください。

5000pv突破！

なんつうか……。複雑（笑）

2ヶ月連載したオリジナル小説がまだ1000も行っていないというのに。

コレが二次創作の力……。ネット界隈のアニメ&特撮ファン力の片鱗を思い知ったぜ……。

とまあ……。ウダウダ言ってるけど、やっぱり嬉しいっす！

コレもすべて読者さんたちのおかげ。読んでくださった方々。お気に入りまでしてくださった方々。一見の方々。愛読してくださってる方々。

本当にありがとうございました！この小説はまだまだ始まったばかり。これからも新世紀 仮面ライダーオーズとSSをよろしくお願ひいたします。

ただただ、感謝です。

2011年 8月 16日 17時20分 自室にて

SS

第五話 「歌と戦いと守った人々」(前書き)

新世紀 仮面ライダーオーズ 〽果て無き欲望〽

この後すぐ！

ジャンクション。今回はタトバコンボで。

第五話 「歌と戦いと守った人々」

新世紀 仮面ライダーオーズ 前回の三つの出来事！

1つ！ エイジは鳥系グリードのアンクと出会い、オーメダルとグリード、ヤミーについて知る。

2つ！ エイジとゲンドウは15年ぶりの再会を果たし、戦うことを命じられる！

3つ！ 覚悟を決めたエイジはすべての王たる戦士、0000^{オーズ}へと変身した！

～ 三人称視点 ～

エイジ「なんだあ？今の変な歌？」

アンク「歌は気にするな！」キリッ！

最後の4文字は幻覚です。忘れてください。

ミサト「エイジ君。時間が無いわ！出撃よー！」

エイジ「分かりました。ウツ！」

突然エイジの脳裏に映像が浮かび上がってきた。4人の怪物とオーズが戦っている。オーズはメダルを入れ替え、緑の昆虫のような姿や黄色の猫科動物のような姿になり戦い続ける……。

「……ジ……イジ君……エイジ君！」

エイジ「！ だ……大丈夫です！」

リッコ「じゃあ、あのエレベーターに乗って。衝撃がちよつと強いからしゃがんでると良いかも。」

頷きそのとつりにするオーズ。

するとモニターにNERVの中枢である第壱発令所が移りだした。ゲンドウも居る。

ミサト「構いませんね？ 碇指令？」

ゲンドウ「もちろんだ。そのためのNERVだ。」

ミサトの問いかけに答えるゲンドウ。その応えに頷いたミサトはオーズに向き直り

ミサト「ソフト・オン人類の未来はあなたにかかっているわ。がんばって。オーズ！ 出撃！」

ミサトの号令と共にエレベーターは動き出した。凄まじいスピードだった。常人なら立っている事もキツイだろう。だがオーズは平然

とじていた。

エイジ（コレがオーズの力……。さっきから体の中に力が溜まってきたみたい！）

<ガシャン！>

エイジ「ミサトさん……。聞こえてますよね……。？何でいきなり目の前なんですか？」

そう……。なぜかオーズはヤミーの目の前に射出された。なぜか相手は気づいてないが。

ミサト「ごめん、無駄話はいい！さっさと戦え！」

途中でアंकが叫ぶ。ちなみにミサトたちの声は町中のスピーカーから流れてきている。

エイジ「戦う……。」

オーズは念じると上半身のトラアームの爪が展開し、トラクローになった。と、同時にヤミーがオーズに気づいた。

カマキリヤミー「！？ 貴様！ 封印の戦士！ オーズ OOO！」

オーズは下半身のバッタレッグの力で跳躍し、一気に間合いを詰めるとクローで切り裂いた！

エイジ「ハッ！ハッ！ハアアア！」

カミキリヤミー「グッ！ウツ！グウツ！」

切り裂かれたヤミーの体から銀色のセルメダルが零れ落ちる。

エイジ「なるほど……。メダルで出来てるってこういう事か！じやあ一気にいきますか！」

そういつてオーズはトラクローとバツタレッグで切り裂き、蹴り上げ、確実にダメージを与えていく。

カマキリヤミー「くう……。ウオラアッ！」

エイジ「ウオッ！グアア！」

しかし、体制を建て直したカマキリヤミーの攻撃を喰らい吹っ飛ばされてしまう。

アंक「チッ！ミサト！腕を変えさせろ！」

ミサト「分かったわ！あつ！でもどうやってメダルを届ければ……」

アंक「馬鹿が！そんなことだろうと思ってネストに仕組んでおいた！」

ミサト「流石アंक！」

ネストとはオーズドライバーの左腰についているメダルの入れ物のこと。実はNERVもオーズを見るのは初めてで、ほとんどの知識はアंकから聞いたものだった。

ミサトは手に持っている通信機に話しかける。

ミサト「エイジ君！真ん中のメダルを左腰のケースに入ってる奴に変えて！」

オーズは言われたとつりに左腰のネストから黄緑色のメダルを取り出しドライバーからはずした黄のトラメダルと見比べた。その隙に突っ込んできたヤミーをガスッと蹴り飛ばし黄緑のカマキリメダルをドライバーの中央の台座に入れスキャンする。

<タカ！・カマキリ！・バッタ！>

すると、黄色だったトラアームが黄緑色のカマキリアームに変わった。トラアームは腕力に優れ、カマキリアームは長いブレードを持っているためリーチと瞬発力に優れる。すばやいカマキリヤミーにはこちらの方が便利だろう。

オーズは腕にマウントされたカマキリソードを分離させ逆手に構えると、一気に切りかかった。

エイジ「ハアツ！ハアツ！おお！使いやすい！」

どうやらカマキリアームがお気に入りようだ。 トラメダル「解せ」貴様は黙っている。

そしてメダルをほとんど失ったカマキリヤミーはひざを突いた。

エイジ「さあて！トドメ、行きますか！」

オーズはアームをトラに戻し、もう一度メダルをスキャンした。基本的な戦い方は頭に流れてきているようだ。

<スキヤニングチャージ！>

エイジ「ハアアアアツ……。」

オーズの全身に力がみなぎっていく。バツタレッグが本物のバツタの足のようになりその力で空高く跳躍した。そしてオーズとヤミーの間に赤・黄・緑のリング状のエネルギーが現れ、それを潜り抜け足にエネルギーを溜め激しいキックをヤミーに喰らわせた。

「タトバキック」だ。

エイジ「セイヤアアアアアアアアツ！」

カマキリヤミー「グアアアアアアアアアツ！」

そして大きな爆発と共にカマキリヤミーはメダルへと還った。

〜数時間後〜

〜ミサト視点〜

戦いの後シンジ君は体に異常も無く、本人の意思もあり正式にオーズとして戦うことになった。しばらくはオーズのデータ収集と訓練の日々となるだろう。

検査が終わった後、私はシンジ君と住まいについて話した。

エイジ「え！給料に住むところまで用意してくれるんですか!？」

ミサト「え、ええ。もちろん。」

エイジ「いやあ！助かりますよ！このところ野宿続きだったんで！」

私は直感した。放つては置けないと。このおせっかい癖どうにかならんもんかね・・・。

そして、色々あって我が家に同居人が増えた。私・温泉ペンギンのペンペン・エイジ君・・・アンク。

絶対あの二人性格合わなそうだし・・・でも二人とも自分で引き受けちゃったし・・・。

家へ帰る途中、エイジ君を高台に連れて行った。自分が救った町を見て欲しかったから。

エイジ「これは・・・。そういえば、エレベーターで町に上がったとき建物が少なくなっていたとは思っていたけど・・・。町がごっそりなくなってるなんて・・・。」

ミサト「戦いに必要な建物や建造物以外はジオフロントに収納されているの。実は・・・。新しい首都なんて実は嘘。本当は、コアメ

ダルを求めてNERVに来るヤミーやグリードを迎え撃つための迎撃要塞都市。」

そんな話をしている内に建物がせり上がりもとの町に戻っていた。人々も戻ってきている。

混乱や恐怖の表情の人もいるが大半は危機が去ったことへの喜びの表情だ。

ミサト「コレがあなたの守った町よ。」

エイジ「あちこち行っただけど、楽しんで助かる命が無いのはどこも一緒。。。。。」

ミサト「エイジ君。。。。。」

エイジ「でも。。。。あの人たちの命が救えて、笑顔に戻ったなら。。。。苦労した甲斐がありますね！」

ミサト「。。。。ええ！」

そうして私たちは笑いあった。まぶしい夕日の中、さらにまぶしく輝く人々の笑顔を見ながら。。。。。

第五話 「歌と戦いと守った人々」(後書き)

次回予告

「チョ〜ツチ散らかつてるケド気にしないで！」

「掃除しません？」

「ハン！うるさい女と馬鹿が同居人とはな！」

「お風呂は心の洗濯よ！」

第六話 「新居とゴミ屋敷と心の洗濯」

初めての戦闘描写不安だな・・・。
ぜひ感想を！

サブタイの意味 歌 タトバ！

戦い エイジの初戦闘

守った人々 第3新東京市の人々

没サブタイ案 「夕日と初戦闘と歌は気にするな！」
せっかくの初戦闘なのでまじめに行こうと思えばボツにけっこう気に入ってるんだけど・・・。

追記 ネタが浮かばないので第六話の内容を変更しました。楽しみにしてくださいましていた方申し訳ありません。

コアメダル紹介（前書き）

コアメダルの紹介。新しいコアが登場するたびに更新します。

コアメダル紹介

ヘッド 頭部を司るメダル。裏側の線は一本。

タカ・コア 鳥系グリードアングのコアメダル。

複眼の色は緑。額のオークオーツガーネット色のひし形。視力に優れており、遙か彼方まで見渡すことが出来、任意の物をロックオンすることも出来る。

原作最終回では視聴者の涙を誘う演出に一役買った。

アーム 腕部を司るメダル。裏側の線は二本。

トラ・コア 猫系グリードのコアメダル。

腕力に優れており、両前腕部に爪状の「トラクロー」がついており、相手を切り裂くことができる。

レッグ 脚部を司るメダル。裏側の線は三本。

バッタ・コア 昆虫系グリードのコアメダル。

ジャンプ力に優れる。その力を最大限に開放する際は本物のバッタ足のような形状になる。

番外編 実験（前書き）

第六話のネタが浮かばずにその場しのぎでやった。即興だから駄文だ。反省はしていない。

番外編 実験

第五話から数日後・・・

〈NERV本部訓練ルーム〉

エイジ「変身！」

<タカ！・カマキリ！・バッタ！>

リッコ「タトバ以外のメダルを最初から使っても変身できる。と、エイジくん、そのままスキヤニングチャージをやってみて。」

エイジ「はい。」

<スキヤニングチャージ！>

タカキリバの足がバッタのような形状になり空高く跳躍。そしてタカヘッドで訓練用ターゲットをロックオンし、エネルギーを纏い強化されたカマキリソードで切り裂く！

エイジ「ハアアア・・・！ハッ！セイヤアアアアアアアア！」

リッコ「うん。この形態でもスキヤニングチャージは可能。これでタトバとタカキリバは調べ終わったわね。エイジ君！次はコレを使
って」

その言葉と同時に訓練ルームに一振りの剣が運ばれてきた。オーズドライバーと同じカラーリングの剣だ。

リッコ「それは「メダジャリバー」セルメダルを入れてそれをスキャンすることによってスキヤニングチャージを放てるの。やってみて。全部で三枚入れられるわ。」

エイジ「了解です。」

オーズがまず1枚だけメダルを入れる。と、同時に監視ルームの窓が防壁に覆われた。

リッコ「悪いけど、解析の結果オーズがメダジャリバーを使うとんでもないエネルギーが発生するらしいの。悪いけど嚴重にいかせてもらうわ。」

エイジ「分かりました。皆さん気をつけてくださいね。」

そしてオーズはメダルが1枚入ったメダジャリバーをスキャンした。

<シングル！スキヤニングチャージ！>

そうすると、メダジャリバーの刀身が輝きだした。

エイジ「ハアアアアア・・・！セイヤアアアアア！」

そして近くのターゲットを切りつける。するとターゲットは跡形もなくなっていた。

リッコ「一枚でこのパワー・・・！エイジ君！続けて！」

リッコは興奮していた。自分の作ったものがこれまで強力だったのだからムリもない。

そしてオーズは2枚目のメダルを入れる。

<ダブル！スキヤニングチャージ！>

エイジ「ハアアア・・・！」

またしても刀身が輝く。そして離れた所で固まっているターゲットに横薙ぎに振ると巨大な真空波が発生し、ターゲットを一つ残らず切り裂いた。

続いて3枚目。

<トリプル！スキヤニングチャージ！>

エイジ「！？ ハアアアア・・・！」

オーズはこれまでとは比べ物にならないパワーを感じ、声にも力がこもる。

エイジ「ハアアアアアアアア！セイヤアアアアアアアアアアアア！」

そしてオーズはメダジャリバーを一閃した・・・。

その瞬間その場に居た全員が自分の目を疑った。自分の目に映っている「風景」が切れたのだ。

そして風景は逆回しのように戻り、ターゲットは戻らずそのまま爆

散した。

リッコ「すごい・・・！予想以上のパワー！」

そのまま興奮冷めやらぬリッコに指示されあれよあれよとデータを
取らされ、へとへとになりながら帰路に着くエイジであった・・・。

番外編 実験（後書き）

自分で見返しても駄文と分かる。最近で一番出来が悪いかも・・・。

番外編 「リレーとタジャドルと三人目のエイジ」（前書き）

ハナトさん発のリレー小説です。

第一話はハナトさんの「魔法仮面リリカルオーズStrikers」

第二話はゼロディアスさんの「仮面ライダーディケイド 異界の旅」

第三話は棒人間さんの「ウルトラマンツイン」

第四話はカオスさんの「魔法少女リリカルなのはStrikers 世界の殲滅者ディガルド」となっております。そちらを読んでからこの作品を読むことをお勧めします。

イヤ、本当すごいよ。みなさんの作品。俺のなんか比べモンにならないくらい。

時間軸は全部のコンボが登場した頃。どっだけ先なんだよ。

番外編 「リレーとタジャドルと三人目のエイジ」

仮面ライダーオーズ外伝 六人の作者

これまでの三つの出来事！

一つ！ 青年「日野映司」はひよんな事から〇〇〇とグリードの封印をといてしまい、鳥系グリード「アंक」と共に世界をめぐりグリード達を倒すこととなる！

二つ！ 様々な世界をめぐり、その世界の戦士たちと絆を紡ぎ映司たちは「力」、「コンボ」を手に入れていく！

そして三つ！ 「デイガルドの世界」へたどり着いた映司一行はサゴゾコンボの力でグリードの一人「ガメル」を倒した。ただ純粋に愛する者を求めていた彼を、とある世界の博士の言っていたように美しい幻想を抱いている内に・・・。

現在オーズの使えるメダルは！

タカ・コア×2

トラ・コア×1

バッタ・コア×1

クワガタ・コア×1

カマキリ・コア×1

ライオン・コア×2

チーター・コア×1

サイ・コア×1

ゴリラ・コア×1

ゾウ・コア×1

タコ・コア×1

そして、オーズが手に入れたコンボは！

タトバコンボ

ガタキリバコンボ

ラトラーターコンボ

サゴゾコンボ

三人称視点

NERV本部内の通路。突如現れた灰色の壁から一人の青年と一本の腕が出てくる。ホラーな光景だがリレー小説をここまで読んでこられたアナタならもうお馴染みだろう。「彼ら」だ。

アंक「ほう……。」

映司「？アंक？どうしたの？」

アंक「どうやらこの世界でもオーズとグリードが戦っているらしいな。」

映司「ってことは……マズインじゃない？」

映司が危惧しているのは複数のグリードと戦うことだ。この世界にたどり着いたということは、自分の世界のグリードが居るということ。グリードに太刀打ちできるのはコンボだけが相手は複数のグリードであるならコンボでもキツイ。それにコンボは体力の消耗が激しい。苦戦や長期戦を強いられれば体力が持たずに、倒されてし

まうだろう。

アंक「大丈夫だろ。この世界のオーズが居るんだ。それより、まだ倒していないグリードは……っ!!」

映司「えーっと。ウヴァはドサクサにまぎれて逃げてたような気がする。カザリとガメルは倒したよな……。」

(僕はまだ倒されてない……。覚えておくんだね……!)

映司「っ!!」

今の声はライオンメダルから聞こえた。ライオンメダルを見つめる映司だが普通のコアだ。

映司がそんなことをしている間にアंकはなにかに取り付かれたかのようにふらふらと飛んでいた。行く先には……。

アイスクャンデーが落ちていた。それが作り物で糸がついており少しずつ後ろに引っ張られている事にアंकは気づかない。そしてアंकとアイスが突き当たりたどり着いた時……。

???「アंकつつかまえた〜! たく! 俺以外のソルジャーズが出払ってるんだから、発令所にいなきゃダメって言うてるだろ!」

横から少年が現れ、アंकを捕まえて走り去ってしまった。この世界でオーズとして戦い続ける少年「碓エイジ」だ。

そんな事も知らず、しばらくライオンメダルとにらめっこしていた

映司だったがアंकが居なくなっていることによつやく気がついた。

映司「アंक？アंक？」

エイジ視点

いや、魚釣りじゃなくて、鳥を釣ったのは初めてだな。そんなことを思いながら俺はアंकを抱えながら発令所に向かっていた。なんと腕だけになっているのかは分からないけど。

エイジ「アंक捕まえてきました！」

アंक「あ？何言ってるんだ？俺はここに居るぞ？」

そこには……。いつもどりの人間の姿をしたアंकがいた。

エ？じゃあ俺が小脇に抱えてる腕アंकは何？

腕アंक「何してんだテメエ！！って映司そつくりだな。お前がこの世界のオーズか？」

エイジ「え？ああ、オーズは俺だけだ。この世界？」

そのときミサトさんが発令所に入ってきた。男性も一緒だ。

ミサト「へ？エイジ君？」

一緒に居る男性は……。俺だった。まったく同じ顔。ってわけでもないけど。俺の方が若干幼い。そして俺たちは同時に叫んだ。

WEIジ「うええ！？俺だ！？」

三人称視点

ミサト「話を纏めると。あなたたちは違う世界の映司君と、アंक。オーズに変身してグリードを倒すためにいるんな世界を旅してる」と

ミサトが映司たちの説明を要約している。映司は腕アंकに話しかけた。さっきから落ち着きが無い。

映司「腕アंक。どうしたんだよ？さっきから。」

腕アंक「腕アंकじゃない。さっきから感じるんだよ……。」

映司「何を？」

腕アंक「この世界に俺のコアがある！」

全員「!?!」

腕アंक「気に入らないのは……。誰かが俺のコアを使っている
ってことだ。」

ミサト「なるほどね。」

エイジ「ミサトさん? どうしたんです?」

ミサトが持っていた端末を全員に見せる。そこにはグリードの反応
を示す画面が現れていた。その色は青色。しかし……。

エイジ「そんな!?! この世界のメズールは倒したはずじゃ!?!」

映司「ってことは。」

腕アंक「俺たちの世界のメズールか。」

ミサト「しかも火の攻撃を使っていたわ。おそらく……。」

アंक「俺の、いやお前のコアを持ってるな。」

腕アंक「あ? 俺のクセにでかい面すんじゃないえ。」

アंक「何だと?」

エイジ「待ってって! アंक!」

映司「そうだよ! 腕アंक!」

腕アंक「腕じゃない！アंकだ！！」

ミサト「あー・・・」

<ギヤーギヤー！>

ミサト「あー。」

<ピーピー！>

ミサト「あー！！」

<シン・・・>

ミサト「もう第一級戦闘配置になってるんで二人とも変身してくれます！？」

WEイジ「はい・・・。」

アंक「しかし、厄介だな。」

腕アंक「ああ。」

ミサト「どういうこと？」

アंक「水と火を持ってるんだ。」

腕アंक「メズールに強いガタキリバは火に弱いから使えない。同じくラトラーターは火の力で通用しにくい。サゴーズは対複数戦が

苦手だからヤミーを作っていた場合苦戦するだろう。タジャドルとシヤウタは相殺されるから苦戦するだろうな……。」

エイジ「でも……。」

映司「やるしかないでしょ！」

そして、二人のエイジはドライバーを巻き、お互いの相棒のアंकに渡されたメダルで変身した。

Wエイジ「変身!!」

<<タカ!・トラ!・バッタ!>>

<<タ・ト・バ! タトバ タ・ト・バ!>>

そしてタトバコンボに変身し、出撃用のリフトに乗った。

ミサト「防衛ラインの強化は済んでる。なにかあったらムリしないで退却よ!良いわね?」

Wエイジ「はい!」

ミサト「オーズ!出撃!リフト・オン!」

〈数時間後〉

エイジ「グア！」

映司「エイジ君！」

二人は苦戦していた。メズールはアंकのコアを取り込んでいたため擬似完全体になっていた。そしてヤミーも製造されていた。メズールのヤミーは個々の力は弱い代わりに数の多さが特徴的だが今回は数は少ない代わりに力が強力だった。おまけに火と水の両方の力を備えているため厄介だ。

ミサト「アंक！何か手立て無いの！？」

アंक「アイツを倒すにはタジヤドル二体分の炎が必要かもな……」

腕アंक「もしくは、シャウタ二体分の水が。」

ミサト「ナルホド……。二人とも良く聞いて。私にチョツチ良い考えがあるわよ。」

Wエイジ「へ？」「

ミサト「二人ともラトラーターになって！」

そしてWオーズはドライバーのメダルを入れ替えスキャンする。

<<ライオン！・トラ！・チーター！>>

<<ラタラタ〜！ラトラ〜タ〜！！>>

そこまでして、二人にもミサトの考えが分かった。

映司「俺が行くから」

エイジ「俺が足止めですね」

そういつて二人は同時にライオディアスを放射する！

メズール「だから効かないって言うてるでしょう？」

しかしメズールの懐に映司オーズがもぐりこんだ瞬間メズールの表情は余裕から驚愕に変わった。そこ！怪人だから表情なんて無いと
か言わない！！

映司「ウリヤツ！！」

メズール「きゃああああ！！」

そして映司オーズはトラクローをメズールの体内に突っ込み赤いメ
ダルを二枚取り出した！

メズール「なんで……。どうして私に近づけたの！？」

エイジ「お前の目は熱を感知するソナー。でもライオディアスは灼
熱の熱線。それを照射すればソナーで俺たちを感知できなくなる。」

映司「そこを俺がチーターで駆け寄りメダルを頂戴したってワケ！」

メズール「覚えておきなさい！」

そういつてメズールは別の世界に逃げた。

エイジ「あっ！待て！」

映司「待った！今はこいつらを倒すのが先決でしょ！！」

エイジ「了解！」

そして二人は同時に三枚のメダルをスキャンした。

<<タカ！・クジャク！・コンドル！>>

<<タ〜ジャ〜ドル〜！>>

Wエイジ「ハアアアアアアアアアアツ！！」

凄まじい炎を体に進らせながらその戦士は誕生した。オーズの全コンボの中で最も神々しいその形態は「降臨」という言葉が最も相応しいようにも思える。

エイジ「映司さん！行きます！」

映司「うん！！」

そして左腕に「タジャスピナー」を出現させ、中のセルをコアに変えスキャンする。

<<クワガタ！・カマキリ！・ライオン！・トラ！・サイ！・ゴリラ！・タコ！>>

そして、そのままドライバーのタカ・クジャク・コンドルのメダルもスキャンする。

<<タカ!・クジャク!・コンドル!　ギガスキャンニングチャーヂ
!!!>>

本来はセルメダル+その時ドライバーに収まっているコアメダルで連続でスキャンするのがギガスキャンだが今回は七枚のコアをギガスキャンした後さらにドライバーの三枚をスキャンニングチャーヂするという計10枚のコアを使うという危険な技だがその分スキャンニングチャーヂやギガスキャンより遙かに強力だ。

そして「タジヤスピナー」にみなぎるエネルギーを同時に上空に発射した。すると二人の上空にタトバキツクの時と同じリング状のエネルギーが頭上に出現。二人はクジャクウイングを展開しそのまま真上に飛び上がりリングを潜り抜けながら上昇しエネルギーを体に纏う。

そしてヤミーたちとオーズの間には赤い三つのリングが出現。エイジオーズはコンドルレッグを展開しプロミネンスドロップの体制に、映司オーズは不死鳥型の虹色の炎を纏いながらマグナブレイズの体制に入った。そして……。

Wエイジ「ハアアアアアアッ!!セイヤアアアアアアアアアア
!!!」

「ギガプロミネンスドロップ」と「ギガマグナブレイズ」を放った。

そして、戦闘場所には凄まじい火柱が上がった。その火柱は数分後によろやく収まった。その後には凄まじい大きさのクレーターとその中心に気絶した二人の映司が倒れていた……。

〽数日後〽

映司「イヤ〽参ったね！」

エイジ「ホントですね！」

二人の映司はその後入院していたが先を急ぐ、という理由で映司は意識を取り戻した直後に退院。エイジも見送りのために退院した。

エイジ「ところで、映司さん。聞きたい事が。」

映司「なに？」

エイジ「何があれば生きていけます？」

映司「ちよっとのお金と明日のパンツ!！」

そして二人ともやり遂げた顔で固い握手を交わすと、お互いのパンツを交換し合った。

その光景を見ていたミサトは引くしかなかった。

しかし二人のアंकは同じことを考えていた。

((コイツのコアは俺のと同じだから頂けばいいんじゃないか?))

と、二人ともやっぱりアंकだ。腹黒い。しかし、こうも考えていた。

((10枚もコアの力使つといてどうして暴走しない?))

と、その答えはいまは誰にも分からない。

映司「じゃあ!」

エイジ「また会いましょう!」

そして、一人と一本の腕は灰色の壁の向こうに消えた。

そして……。

エイジ「ミサトさん? どうしました? なんかやつれてる様な……?」

ミサト「あ? 誰の所為だと思ってんのよ……? あんたたちの作ったクレーターのおかげで始末書がハンパじゃないの!! どうしてく

れんのよー!」

エイジ「あー!ゴメンなさい!」

ミサト「ゴメンで済んだら警察もNERVも要らないわよー!」

アング「ハンツ!馬鹿共が!」

夕日がいつもどりの三人組を包んでいた……

続く

新メダル

クジャク・コア+1

コンドル・コア+1

新コンボ

タジャドルコンボ

番外編 「リレーとタジャドルと三人目のエイジ」(後書き)

次回の！仮面ライダーオーズ外伝は！

「綺麗なコインばつだから、宝物にしよう、っと！」

「チツ！なんなんだ、この世界は。」

「「やっちまえ(やって)、映司^{きん}！」

「変身！」

「シャチ！・ウナギ！・タコ！」

「精霊と恋心と青のコンボ」

今回はフュージョニストさんの遊戯王5D・S 季節はずれの転校生の世界

お楽しみに！

なんか後半(つつーか全部?) 雑な気がする・・・。

皆さんすんません！コレが俺の今の限界だ！！

感想お待ちしております。ぜひ、良い点悪い点のご指摘お願いします！

第六話 「新居とゴミ屋敷と心の洗濯」(前書き)

遅くなって申し訳ありません!!

フォーゼ面白いなあ・・・

今回のジャンクションはアंकがキメてる所を

第六話 「新居とゴミ屋敷と心の洗濯」

新世紀 仮面ライダーオーズ 前回の三つの出来事！

1つ！ 碓エイジはすべての王たる戦士。オーズに変身するが謎のビジョンを見る！

2つ！ その圧倒的パワーでオーズはカマキリヤミーに圧勝し、街を救う！

そして3つ！ 守った人々の笑顔を見たエイジは人々を守る覚悟を再び固めた！

現在、オーズが使えるメダルは！

タカ・コア×1

トラ・コア×1

バッタ・コア×1

カマキリ・コア×1

エイジ視点

俺たちは高台を後にし、ミサトさんの家に向かっていった。

「どんな家なんですか？」

「そこそこ広めで良い所よ。カワイイペットも居るし。」

なるほど。動物は好きだし、なかなか良い所らしいな。

その時はそう思っていた・・・でもその幻想は見事に壊された。そういえば、学園都市の当麻くん。元気かな。

数分後・・・

途中のコンビニでいろいろお惣菜を買ってマンションのエレベーターで上がっている。食事くらい俺が作ると言っただけど、食材が何もないと言っことで買って行く事にした。

そして、ミサトさんの部屋に着いた。ドアは普通のマンションみただい。

「チョーッチ散らかってるケド、気にしないでね!」

そう言っつて鍵を開け、中に招いてくれるミサトさん。しかし、次の瞬間俺は絶句した。

まず、玄関。ゴミ袋の山。それ以外に表現する言葉が見つからない。

なんとか足の踏み場を見つけ、靴を脱ぎ、お邪魔する。

そして、リビング。なるほど。いい部屋だ。でも、やっぱりゴミ袋の山だ。よくよく観察してみると最初は部屋の隅に集められていたのだらう。しかし、次第にそれが部屋の中央を侵食して行き、今ではもう少しで日常生活が脅かされるレベルに達している。

一言で言っつなら『ゴミ屋敷』だ。たまらず俺は言った。

「掃除しません?」

と。

数時間後・・・

ミサト視点

つ・・・疲れた・・・。

突然エイジ君が掃除するなんて言い出して、まあ・・・散らかってるなんてレベルじゃない事くらい自覚してたケド・・・コレは凄くよくもまあ、こんな部屋にこれまで過ごして来たわね。

そんなこんなで『人の住める部屋』へと劇的な変化を遂げたマイルームでお惣菜を食べる私とエイジ君。他愛も無い雑談をしていると、玄関からだれか入ってきた。

「あ、アंक。お帰り〜。」

「アंक？」

もう一人の同居人に挨拶をする私と、「何でここに？」って顔をするエイジ君。

「おい。ミサト。なんでコイツがここにいる？」

「新しい同居人よ。仲良くしなさいよね〜。」

すると、エイジ君がアंकに向かって

「アंकも食べる？」

と訊いた。順応早すぎない？

「いらん。」

そういつていつも通り冷凍庫からアイスを取り、口にするアंक。

まったく。他の物も食べなさいって言っているのに。こんなんじゃ

『信吾くんの体』が持たないわよ。

そしてアイスを食べながら口に含みながら部屋へ向かうアंक。捨て台詞に

「チッ！うるさいババ・・・女と馬鹿が同居人とはな！」

プツッン

「ちょっとアंक！！今なんて言おうとしたのよ！！」

「フンッ！」

まったく！一言多すぎよ。

「そういえば、ミサトさん。」

「ん？どうしたの？」

「アंकってグリードなんですよね。なんで他のグリードみたいに俺たちと敵対していないんですか？」

「そうね。正確に言うとアंकは味方ってワケでもないわ。利害一
致で私たちに協力しているだけ。まあ、詳しい事は順を追って説明
するわ。」

そう言っつて時計をチエック。もう結構な時間ね。

「エイジくん。お風呂入っちゃいなさい。お風呂は心の洗濯よ!」

「え? あ、ハイ。」

そういつて指し示した風呂場へ行くエイジ君。しばらくすると

「うわあああああああああ!」

凄まじい悲鳴が上がった。もしかして、まだ『ペンペン』が入って
いたかな!? そりゃあペンギンがお風呂に入っていたら驚くわ。そ
う思いながら脱衣所へ突入し

「エイジ君。大丈夫?」

しかし、そこに広がっていたのはシユール極まりない光景だった。
まず、ペンペン。タオルを首から掛け、我が物顔で脱衣所から出て
くるペンペン。

しかし、そんなペンペンには目もくれずに、エイジ君はパンツ一丁
で手の中の『ある物』を見ながら絶叫していた。それは……

「お……俺のパンツがあああああ!」

紳士用下着。所謂トランクスと呼ばれるそれはいまエイジ君が穿い

ている物と同じく、一般より少々派手で大きめ。しかし、中央には大きな穴と焦げがある。どこからどう見ても燃えている。

「うわあああああ！俺の明日があああああ！！」

絶叫し、嘆くエイジ君を見ながら私は思わずつぶやいていた。

「大丈夫なの・・・？この生活？」

と・・・

New medals

無し

Lost medals

無し

第六話 「新居とゴミ屋敷と心の洗濯」(後書き)

次回予告

「学生は学校行かなくちゃ!」

「オウ、転校生。ちょっとツラかせや。」

「お前が遅れたせいでワシの妹は!」

「俺のせいで・・・ゴメン!」

第七話 「学校と償いと新たなヤミー」

感想等マツテマース!!

サブタイの意味

新居 ミサトの家

ゴミ屋敷 同上

心の洗濯 風呂

ライダー紹介をバースについて更新しました。見てみてください。
オリジナルの武装もあるヨ!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6934v/>

新世紀 仮面ライダーオーズ ~果て無き欲望~

2011年10月9日05時14分発行